

第四百十回 青葉会

令和二年六月二十五日(木) 午後一時半〜五時 於：文京区民センター会議室

〈選者〉 ◎ 川口孤舟

〈出席者〉 今井紀久男 川口孤舟 久米五郎太 在間千恵 佐藤ただしげ

〈投句〉 伊賀山そらお 柿崎忠彦 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか

中川雅夫 長谷見びん 古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也 山田けい子 山内天牛

渡邊盛雄

赤田 堅 安部眞希子 小西弘子 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎 土谷堂哉 橋口隆

長谷見びん 早川充章 福島正明 星田啓子 松崎浩 村田くに子 山本三恵

《互選句》 ◎は孤舟選者の選

十点 ◎ 洞窟は時停めしまま沖繩忌 盛雄 (堅・眞・紀・孤・五・弘・敏・堂・充・啓)

七点 ◎ 坪庭と風共にして夏座敷 啓子 (孤・五・千・龍・堂・充・正)

髪洗ふ妻愛ほしき瘡病棟 規雄 (眞・紀・敏・堂・隆・充・び)

六点 日の余熱ある赤茄子を挽ぎにけり 孤舟 (紀・弘・堂・正・啓・三)

五点 ◎ 清閑の日々を籠りて花は葉に びん (紀・孤・た・孝・敏)

四点 梅雨冷えや小屋の灯つかぬ芝居小屋 紀久男 (た・充・正・三)

天空へ咲きのぼりゆく立葵 孤舟 (堅・孝・隆・啓)

空梅雨や弾む声あり時差登校 健介 (紀・弘・た・く)

我が腰へ魔女の一撃梅雨晴間 全 (紀・千・敏・充)

千鳥ヶ淵・戦没者霊苑 五郎太 (紀・孤・孝・浩)

◎ 人氣なき墓苑の角の花デイゴ 五郎太 (紀・孤・孝・浩)

◎ つゆ空にやつと始まる一年生 横田滋さん ただしげ (紀・孤・敏・隆)

◎ 父逝くや我が娘に会はず梅雨に入る 千恵 (孤・敏・堂・隆)

くちなしやはかなきが故無垢の白 亜也 (堅・紀・た・孝)

母逝きてどくだみ匂ふ蔵整理 けい子 (眞・紀・五・び)

◎ 荒梅雨や時に心も雨やどり 盛雄 (孤・五・た・浩)

◎ 宅配のベルは二度鳴る夕立雲 全 (孤・千・堂・び)

三点 老鶯の一声渡り山しずか 忠彦 (堅・紀・く)

暮れ方の杜蝙蝠の空となる 孤舟 (紀・五・び)

梅雨晴間川辺に響くトランペット 五郎太 (千・充・隆)

◎ 青葉闇本と写真の捨て処 びん (眞・孤・啓)

居を出でよ六根清浄夏来る 全 (堅・紀・三)

茄子の花夕餉の匂ひ満つる路地 啓子 (紀・正・浩)

二点 鎌倉のあじさい寺にて そらお (紀・啓)

紫陽花を何度もくぐりしとど濡れ 忠彦 (紀・く)

六月や子等嬉々として初登校 全 (千・龍)

紫陽花やふと立ち止まる好きな色 孤舟 (紀・三)

◎ 膝つきて蚩袋をのぞき込み 五郎太 (紀・孤)

をみなごら柘榴の花の下にあり 全 (紀・び)

女王かな見るも食みるもさくらんぼ 千恵 (堅・龍)

紫陽花の揺れて雨待つ風情かな 恵洲 (た・正)

滑舌の悪い嘶家梅雨しとど 全 (紀・三)

休館の続く図書館梅雨に入る 全 (隆・正)

黒鯛(ちぬ)煮るや大鍋傾げ煮汁掛け 堂哉 (弘・浩)

延着の夏のマスクとなりにけり 昇 (紀・弘)

羽化の刻待つ黒揚羽擬態して 啓子 (紀・弘)

裂織(さきおり)や埋め込む古布に薄暑光 全 (眞・び)

稽古終へ宗右衛門町のうなぎ食ぶ けい子 (紀・浩)

大南風(おおはえ)にボラ待ちやぐら揺れる能登 全 (啓・三)

立ち話しつつ桑の実むしり食ふ 天牛 (紀・龍)

一点 西瓜切る甘みほど良き大ききで そらお (孝)

とぐる巻き児らを睨(ね)めつく青大将 紀久男 (龍)

◎ 新樹光辞儀もはつらつ散歩道 全 (孤)

身に堪(こた)ふかんかん照りに梅雨の冷 全 (龍)

崩し方思案してをりかき氷 孤舟 (啓)

アガパンサス愛はさまざま夏の風 五郎太 (孝)

待ちわびた野球始まる梅雨最中
 梅雨晴間心弾みてストレッチ
 雨あがりアジサイ寺の今日の色
 ゆる抜けば田植えの準備忙(せは)しなく
 澄んだ空青葉若葉が目にしみる
 土佐の酒叔父貴と交わす初鱈
 (上五↓ ↑下五)

銀の匙磨き揃へし梅雨晴れ間
 待ちわびし出湯に憩ふ夏夕べ
 ひさびさのアリアにしびれ夏の夕
 「生」追えば老鶯鳴けり壺中天
 どくだみは我に歌ふや並びゆれ
 桜桃忌酸いも甘いも昭和かな
 賑いの絶えし寺町濃紫陽花
 南国のオーシャンビューや明易し
 その風情雲鬢花顔(うんびんかがん)美女柳
 (美女柳が夏の季語)
 新聞にラツキヨ五キロも漬けた「声」
 日除けせし廚でつくる中華そば
 * * * * *

●次回青葉会

七月二十二日(水) 午後一時半～五時 文京区民センター会議室
 ▲当季雑詠各自五句 投句は三句まで
 令和二年 七月八日 文責 紀久男



令和二年六月 青葉会報
 一、 自粛要請が解かれ三か月ぶりの句会。コロナ用心の為、出席は孤舟選者始め5名。投句は長谷見敏さんら15名。千恵さん寄贈の純吟「蓬莱」(飛驒)小生持参・広島の社友、田部修司さんからの大吟醸「同期の桜」(江田島)とおかきを賞味しつつ開始。五郎太さん進行役で、ご覧のように盛雄さん、啓子さん、規雄さんが好成績でした。回覧は眞希子さんからのFax(万里子先生の近況等)、「萩」の幹部↓「銀漢」、国際俳句交流協会々員。むもんいつき)昭和三十六年入社、香港駐在等。「萩」の幹部↓「銀漢」、国際俳句交流協会々員。漢俳をマスターされ独・仏・西・韓・露の五か国語勉強中の由。間質性肺炎で在宅治療中の由)

二、関係者近詠
 病状のメール刻々冴返る 眞希子 真夜中の守宮(やもり)の腹の白さかな 正明
 脆き看護士問診春暖房 全 戦(たたかひ)の不気味な匂ひ七変化 全
 菜の花や仕事無き日の日に二食 全 梶子(くちなし)や夜の帳(とぼり)が重くなる 全
 初蝶に弾ますチツプリハビリへ 全 満月を涼しく上げて独り酒 充章
 初雛をいま見て来しといふルージュ 弘子 梶子の香のまとひつく闇夜かな 全
 叱りつつ恋猫入れて戸の閉まる 全 夏蜜柑食べる前から唾溜めて 全
 茹でたてのそら豆話何だっけ 全 赴任地は富士見ゆる町新茶酌む 盛雄
 花の枝にあんずと書かれ札下がる 全 気散じのそぞろ歩きや夕焼雲 全
 菜の花を抜けて真砂女の越えし海 青史 梶子やまだピカピカのランドセル 健介
 残る鴨つがひの間(あい)に節度あり 全 梶子やいつも笑顔の母なりき 全
 鶴帰る長生きわれに吉事(よごと)なし 全 且那衆の木遣り先頭夏祭 紀久男
 病室に誰が心延へ薔薇一輪 全 朝な夕な姿みせずにはととぎす 全
 一「森の座」6月号 規雄 一「きさらぎ句会」6月

三、人気TVプレバトより 兼題「おひねり」(五月二十八日放映) 梅沢富美男
 おひねりや子役の見得に夏芝居
 ↓おひねりの飴よ硬貨よ夏芝居 (夏井いつきの添削)

四、孤舟選者の第4句集「星空」より小生好みの句を抄出してみました

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 秋虹の脚D51の遠汽笛 | 21 点り初むる合掌の里雪しまく |
| 2 鷹渡る結願寺の五重塔 | 22 なまはげの吠え星空を沸き立たす |
| 3 黎明の杜裂帛の鴟のこゑ | 23 さへづりや山懐の禁漁区 |
| 4 しぐるるや出家ごころの捨て切れず | 24 夕焼けを思ひ切り蹴り尻上がり |
| 5 背負ふべきもの未だ知らず青鷹 | 25 木守柿ぼつん夕日の忘れ物 |
| 6 淡き日を曳きさ走りのみそさざい | 26 ひとたびは捨てしふるさと雪解川 |
| 7 春満月陶の狸と酌むとせむ | 27 夢見るに程よき高さハンモック |
| 8 紅型の花鳥ちりばめアロハシャツ | 28 かなかなの森を大きくしてをりぬ |
| 9 ハンモック風の機嫌を聞いてをり | 29 錦絵のをんなも濡るる初しぐれ |
| 10 本心を衝かれ扇子の風止むる | 30 しぐるるや蛇の目行き交ふ先斗町 |
| 11 軒下の写楽の顎の唐辛子 | |
| 12 狐火や宵の陣屋の座敷牢 | |
| 13 縄張りのうぐひす既にナルシスト | |
| 14 ネクタイを外しなさいよ四十雀 | |
| 15 シナトラのドーナツ盤や冬銀河 | |
| 16 謂れなき御手討に遭ふごきかぶり | |
| 17 楊貴妃になりきつてゐる菊人形 | |
| 18 雪無音旧約聖書繙きぬ | |
| 19 小鳥着て森のやさしくなりにけり | |
| 20 蒼穹へ合掌を解く白木蓮 | |

令和二年七月八日

紀久男 記